


 巻頭言


天文学と社会をつなぐコミュニケーション

嶺 重 慎

〈京都大学大学院理学研究科 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町〉

e-mail: shm@kusastro.kyoto-u.ac.jp

特集「天文学と社会をつなぐコミュニケーション」を企画するに至った背景や目的をまとめます。今ほど天文学と社会とがさまざまなルートでつながった時代はなかったといえます。そのつながりは今後さらに深められていくことでしょう。若い人に、社会とのコミュニケーションの具体的な内容を一線で働く方々の生の声を通して伝えたい、その思いで本特集を企画しました。

天文や宇宙の研究を志す若い人たちが増えてきました。その若い学生たちと話していると、少なくない割合の人が、自らの研究や学びを何らかの形で社会の中で生かしたいと思っているらしいことに気づきます。決して研究に不満があるわけではないが、それだけではもの足りないと感じているようです。研究がプロジェクト化して個人の役割や貢献が見えにくくなるなか、社会との接点を通して「確かな手応え」を得たい、そう思っているのかもしれませんが。

その思いはよくわかります。実際、「アウトリーチやサイエンスコミュニケーションに興味があります。でもどこからどう始めればよいかわかりません」「初心者でも参加できる活動を紹介してください」といった内容のお伺いを受けることがしばしばあります。

「ここにこういう人たちがいて、こんな活動をしています」という事例を通して今後の参考にしていただきたい、それが本特集を企画した趣旨です。

かくいう私も、実は2004年2月-3月の「天文月報」の特集「多角的アプローチが進む天文教育・普及」に触発され、天文教育活動を始めた一人です。バリ島でIAUアジア太平洋地域会議の

ジュニアセッションを企画し、その足で西はりま天文台で開かれた天文教育普及研究会主催の研究会に参加して、すっかりこの世界の魅力のとりこになって今の自分があります。

「社会とのかかわり」といっても多種多様です。そこで本特集では、大学・研究機関だけでなく、科学館や高校で現実社会とのかかわっておられる方々の「生の声」を伝えることにしました。

どの原稿でも、読んで興味をもったら、ぜひ著者の方々にコンタクトしてください。あるいは日本天文学会年会の「天文教育」セッションや天文教育普及研究会等の会合に参加すると、いろいろな出会いが経験できます。何か実のある活動をしたと思ったら「自ら動く」です。本特集が「自ら動く」を始めるきっかけとなりましたら、執筆者一同、とてもうれしいです。

Communicating with Public through Astronomy

Shin MINESHIGE

Kyoto University

Abstract: The background and the purpose of the special features are briefly overviewed.